氏　　名　藤本　武（ふじもと　たけし）
学位(専攻分野)　博士（人間・環境学）
学位記番号　人博第165号
学位授与の日付　平成14年7月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目　エチオピア西南部マロ社会における農耕の多様性とその構築に関する文化人類学的研究

論文調査委員　（主査）教授 福井勝義　教授 山田孝子　教授 菅原和孝　助教授 重田眞義

論文内容の要旨

本論文は，エチオピア西南部の山岳地帯に暮らす農耕民マロ社会を対象に，長期のフィールドワークに基づき，彼らの主要な生業である農耕について，その作物，品種，農耕技術の三つの領域の多様性を分析した文化人類学的研究である。

第一章では，本論のねらいと関連する先行研究を紹介したのち，調査対象のマロの歴史や社会について概説を述べ，調査の期間や方法を説明している。

つづく第二章では，マロの農耕についてさまざまな視点から分析をおこない，その特質を考察している。地形と植生，人口分布と集落形態，土地利用と土地保有，気候と農耕暦，農耕技術，作物，品種，農耕にかかわる社会制度，農耕以外の生業という節を設け検討している。マロでは高地・低地をとわず一貫して同心円的な土地利用構造が発達しており，農耕地は，大きく家の周囲の「屋敷畑」kara kale とその外側の「外畑」gade に区分される。この二つの農耕地では，作物の種類や土地の利用度，作付，共同労働の有無や性的分業の割合などが異なっている。屋敷畑はマロでみられる栽培植物92種のうち，84種（91.3%）が栽培され，屋敷畑が栽培植物の種レベルにおける多様性の中心となっている。この92種におよぶ栽培植物のうち半数近い40種が，名称や聞き取りによる情報から，国家に編入されて以降の百年あまりのあいだにマロに入ってきたものと推定される。つまり，マロの栽培植物は，近年急速に多様化してきていると考えられる。

これまでの世界の他地域における山地社会の研究では，幅広い自然環境に適応して多様な生業形態が営まれているという文化適応論的な理解が中心であった。マロでも，高度に応じた作物分布や土地利用の仕方があることから，巨視的にその面は認められる。ただ同時に，世帯や集落など，よりミクロな次元でみた場合，マロでは高地・低地をとわず同心円的な土地利用構造が一貫して認められる。人びとは，かぎられた領域内で利用形態を細かく区別しながら，自ら多様な農耕環境を構築し，その中にさまざまな栽培植物を配置しているのである。近年の栽培植物種の多様化傾向も，人びとのこうした社会文化的側面によってはじめて理解される。

第三章では，マロのもっとも重要な食糧源であるバショウ科の根栽作物エンセーテ（*Ensete ventricosum*）についてとりあげ，64という特異的に多いその品種がいかに維持されているのかについて考察している。つまり，品種レベルにおける農耕の多様性の分析といえる。

エンセーテの品種多様性は，他の作物にないさまざまな栽培管理上の諸特性と密接にかかわっており，以下の3点を指摘できる。(1)精細な形態的品種認識，(2)繁殖時も途切れない連続的な品種認識（系譜的品種認識），(3)密な情報伝達をともなう交換である。(1)は，家の周りで3-6年という長期間栽培するため，人びとは生育をつぶさに観察することができることである。(2)は，不定芽の誘導という独特の繁殖技術により大量の苗をえることができるため，エンセーテの繁殖作業は毎回数株の根茎を植えつけるのみで，そのため芽を出して形態的な品種特性を表す前から品種を把握しておくことが可能となっていることである。(3)は，栽培用の苗や株のやりとりは親しい人びとのあいだでおこなわれるため，詳細な情報伝達をともない，交換により品種名は途切れることなく伝わっていくことである。これらがエンセーテの品種区分を特別精細なものに

し，品種多様性をもたらす背景をなしていると考えられる。

さらに，集落間での品種保有状況を比較し，生態条件の類似性より社会空間的な近接性が品種保有に影響していることや，マロでの主要品種は近隣民族でも多く共有されており，外部との接触・交流を通じて品種の多様性が高められてきていることを考察している。いずれも，品種の多様性が社会的に構築されたものであることを示している。

第四章では，エチオピア固有の穀物テフ（*Eragrostis tef*）の耕作技術に焦点をあてて議論を展開している。マロ社会では，テフは高度1000-2000mの範囲で栽培され，土地条件などに応じ，犂耕作，掘棒耕作，二つの手鍬耕作（kurcheとgarpe）という四つの耕作技術が使い分けられている。三つの集落で実施した栽培面積と栽培・休閑年数の分析から，各耕作法の特性を分析している。また，このうち犂耕作とkurche手鍬耕作はマロの東側と北側からもたらされたと推定されることから，耕作技術の多様性も外部との関係のなかで形成されているものであることを論議している。

最終章では，各章の議論を総括している。これまでの遺伝子資源の在地保護や在来知識論では，外部世界との交渉の増大によって，近年地域の多様性は失われつつあるといわれる。しかし，地域社会の農耕など生業の多様性は外部世界との関係性のあり方しだいで多様にもなり得るものであり，その変化の具体的メカニズムを，事例研究を通じてあきらかにしていくことが必要であると論じている。

論文審査の結果の要旨

本論文は，自然と人間の関係という現代の重要課題に対し，文化人類学の立場から実証的にアプローチした研究である。自然と人間の領域の接点にある人びとの生業を分析し，両者の密接な関係性の諸相を浮き彫りにしている。本論文の学術上の貢献として，以下の三点が指摘できる。1）熱帯山地社会における土地利用の分析，2）品種レベルにおける多様性の分析，3）農耕技術レベルにおける多様性の分析。

1）熱帯山地社会における土地利用の分析

申請者は，多数の民族集団が独自の生業文化を育むエチオピア西南部地域で，高度差二千メートル以上にわたる急峻な山岳地帯に居住する農耕民マロ社会を対象に，長期のフィールドワークを実施してきた。本論文は，彼らの主な生業である農耕を，その多様性に着目しながら，集落形態，土地利用，農耕暦，農耕技術，作物，品種など，さまざまな角度から検討し，重要な特性を指摘している。これまでの熱帯山地における生業研究では，多様な自然環境に対する文化的適応という側面が主張されてきた。マロ社会でも，巨視的には主要作物の高度分布などにそうした点は確認される。同時に，対象地域では，同心円的な土地利用構造が顕著に発達し，そのなかに多様な栽培植物が細かく配置されている。自然環境に対する適応とともに，人びと自身による農耕環境の社会文化的な構築という特性が見いだされる。近年栽培植物が多様化してきている現象も，その文脈ではじめて理解されることを，申請者は指摘している。

2）品種レベルにおける農耕多様性の分析

エチオピアは，世界の五大栽培植物起源地のひとつとされ，古くから農耕が営まれてきたことで知られている。本研究では，そのエチオピアで栽培化され，現在ももっぱら地域的重要性を保持するエンセーテとテフという二つの特徴的な作物に関し，詳細な事例分析をおこなっている。バショウ科のエンセーテは，マロの食料源としてもっとも重要な根栽作物であり，同時に夥しい数の品種が認められる。本論では，その品種の多様性が維持される背景を考察している。先行研究における「人・植物関係」の分析をふまえ，本研究では，「人・人関係」，つまり社会的に品種がどのように伝達・継承されるかという点に関しても，品種の多様性を左右するものとして重視し，世帯・集落・民族など異なるレベルでいかに品種が共有されているのかについて精緻な分析を行っている。

3）農耕技術レベルにおける農耕多様性の分析

エチオピア固有の穀物テフについても，詳細な分析がなされている。これまでのテフ研究は，エチオピア北部から中央部のものに集中し，西南部でまとまった研究はなされていなかった。数少ない先行研究でも，本論のように詳細な記載はなく，研究上の空白を埋めるという，基礎的な貢献がまずあげられる。

のみならず，対象地域でのテフ栽培は，他の穀物栽培にない独自の技術が駆使され，また農地を整備する耕作技術では，土地の特性にあわせ，四種類の方法が区別されている。本論では，各方法が使い分けられている様を，耕地面積と栽培・休

閑期間，近隣地域からもたらされたものであることを示唆し，外部とのつながりのなかで農耕技術が多様化してきていることを論じている。

本論は，このように，土地利用と栽培植物，品種，農耕技術という各領域における詳細な分析によって，マロ社会における農耕の多様性は，自然環境への文化的適応という側面とともに，人びとが自ら構築してきている側面が顕著であること，また，近年その農耕の多様性は外部との関係を通じて高まる傾向にあることを示している。

これまでの遺伝子資源の保護や在来知識論などでは，地域独自に育まれてきた多様な生業が，外部世界との接触の増加にともない，急速に失われてきていると議論されている。こうした一般論に再考を促し，外部世界との関係性の増加は地域の生業の多様性を減じるとは限らず，むしろ関係性の中身を具体的な事例研究を積み重ねていくことの必要性を訴えている。このように，本論文は，グロバリゼーションが進行する今日にあって，自然との関係性や地域社会のあり方を模索していくうえでますます重要となる研究である，といえる。

申請者は，大学院入学まもない1993年以来くりかえしエチオピアで長期の集中的な調査を実施し，現地と良好な関係を築きつつ，複数の言語を習得し，本論の記述に豊かな厚みをもたらしている。このように，農耕の多様性を分析軸に，対象地域の人びとの生業を多面的かつ詳細に分析している本論文は，本研究科文化・地域環境学専攻文化人類学講座にふさわしい内容を備えた優秀な研究成果として判断される。また，本論文の前提となった諸論文は，すでに著書（共著）や学会誌に公表され，高い評価を受けている。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成14年５月30日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。